

ドイツ古典派ラウの経済思想

——19世紀前半ドイツ経済思想の新たな地平を求めて——

四日市大学 原田 哲史

はじめに

19世紀前半のドイツ経済思想は、その地平をあらためて見渡すならば、総じて4つの側面からなるであろう。①小林昇の研究を通してわが国でよく知られている、保護貿易主義（したがって産業主義）のフリードリヒ・リスト。②当時学界において主流をなしていた、官房学の余韻を残しながらもスミスの・予定調和的なイギリス古典派思想を摂取していったドイツ古典派。③保守的な——ただし分権主義的な——非産業主義の異端者であるロマン主義。④労働者（運動）思想としての革命的な異端者である初期社会主義と初期マルクス。これら4つの志向がそれぞれの課題をもち——部分的には類似の要素も含みつつ——競合的に主張しあった場が、それであった。今や19世紀前半ドイツの経済思想のそうした複合的な全体構造そのものを明らかにすることが課題である。そうした把握によってまた、複雑な諸要素の絡み合う深刻な現代の社会・経済の問題への間接的な示唆を得ることも可能ではなかろうか。

しかし、わが国において①リスト、③ロマン主義、④初期社会主義・初期マルクスについて多かれ少なかれ研究が進展しているのに比べて、②ドイツ古典派についてはそれ自体の研究が遅れており、全体構造の把握を妨げている。その遅れは、①③④ないしその周辺についての、また後続のドイツ歴史学派やオーストリア学派その他についての研究の進展とともに、一層その必要性が痛感されている（これについて後述）¹。

「ドイツ古典派(deutsche Klassiker)」は、経験的事実への着目や財政学の重視といった官房学的性格のみならず、観念論哲学からの影響や、社会的・客観的な使用価値論の提唱といった特徴をもつ。それは、C. J. クラウス(1753-1807)、G. ザルトーリウス(1765-1828)といったスミス導入者に端を発し、L. H. v. ヤーコブ(1759-1827)、F. J. H. v. ゴーデン(1754-1831)、G. フーフェラント(1760-1817)、H. v. シュトルヒ(1766-1835)、J. F. E. ロッツ(1771-1838)、K. H. ラウ(1792-1870)らにおいて成立し、H. v. マンゴルト(1824-68)に至る、19世紀の前半を中心として後半にも達する（広義では限界理論の先駆者 J. H. テューネンや H. H. ゴッセンも含む）一連の経済学者の総称である(Brandt 1992/93, I, S. 160-226)。詳細な解明にあたってはそれぞれの経済学者に関する個別研究を新たに積み重ねていく必要があるが（例えば原田 2007）、なかでも重視すべきは、著書『政治経済学教本』を通じて圧倒的な影響力を有したラウであろう。この『教本』

¹ 植村邦彦が15年前に「この時代 [1830年代～40年代] のドイツは、経済学史・社会思想史にとっては、これまでもっぱらフリードリヒ・リストと初期のマルクスとを二大登場人物とする舞台」としていることは、興味深い（植村 1992, p.119）。ドイツ・ロマン主義の経済思想については最近ようやく研究の途についた（原田 2002, 木村 2007）。「19世紀前半のドイツ経済思想の多様性」について原田 2006, p.12-20。

は、経済理論に関する第1巻が初版1826年から生前最後の第8版1868/69年まで出され、死後もA.ヴァーグナーとE.ナッセによる改訂第9版1876年が刊行されており、また経済政策に関する第2巻は初版1828年から第5版1862/63年まで刊行され、さらに財政学に関する第3巻は初版(2分冊)1932/37年から生前最後の第5版1864/65を経て、死後その第1部がヴァーグナーによる改訂第6版1872年として刊行されている(Sinewe 1965, S. 139; Schefold 1979, III.2, S. 502-4)。

本報告では残念ながら、ラウの全体像はおろか、彼の特定の論点を著作に深く入って分析することも断念せねばならない。ここではその前段階として、彼の思想を明らかにすることが——周辺領域およびそれに関する研究に目配せするなら——経済学史・経済思想史の研究においてどのような意味を有するのか確認しておくに留まる。

1. 官房学の影響

ラウにおける官房学の影響はどのような意味で言えるのか。シェフォールトは、ラウ(ハイデルベルク大学教授かつバーデンの上院議員)の経済学が「ドイツの中規模国」の官僚の「実践的な」問題の対処に向けられていたというロッシヤーの指摘や(Roscher 1874, S. 848, 855)、『教本』のとりわけ財政学の第3巻が官僚や学生に好まれたというジネーヴェの指摘に言及しつつも(Sinewe 1965, S. 17)、次のように述べている。「明らかに彼の関心は、歳入の増加と徴税力の増強といった伝統的な諸問題に向けられているのではなく [...] 普遍的な経済の諸原理に適合した政府活動に役立つような財政制度を発展させることにあった。だからラウは、財政学の発展を自ら概観している箇所で、官房学者のユスティとフォン・ゾネンフェルスの作品を、官房学者たちの時代の「より良い著作」として挙げている。なぜなら両者こそ「実行において仮定されている基本諸原理を認識して」教えていたからである」(Schefold 1997, I, S. XLVI; Rau 1826-37, III.1, § 21)。国庫を富ます技能というかつての官房学的伝統において重視されてきた財政学の領域がラウにおいても重要であったとしても、理論的な思考が基軸となっていることが決定的なのである。このことは同時に、後期官房学における成熟(リハ 1985, p. 19-26)とそのラウへの接合との解明という課題を、我々に意識させる。

2. 主観主義の価値論とその源泉

ラウはセー法則を理解し、その点において、また差額地代論においてもリカードウと一致するが、精神的労働の生産的意義を認め、価値論に関しては——リカードウ的な労働価値論ではなく——客観的な使用価値論の見地に立っていた、と概して言えるであろう(Schefold 1997, I, S. XXI, XXV, XXXIX; Priddat 1997, S. 251-8)。ただし、ラウの経済学は単なるスミスやセーからの摂取によって生成したわけではない。『教本』第1巻(初版)の財・価値に関する§ 82-85で彼は、セー以外にシュトルヒとロッツを挙げている。『教本』の出版以前に彼は、まずシュトルヒ『政治経済学教程』(1815、原文フランス語)をドイツ語訳しており(1819/20)、そしてマルサス『経

『経済学原理』初版(1820)第7章とセーのマルサス宛書簡集(1821)とをドイツ語訳し『マルサスとセー』というタイトルで1冊にまとめて出版している(1821)。シュトルヒは『教程』において精神的労働を「内的財」論として力説していたから(Schumann 1997, S. 162-3)、ラウはまずシュトルヒの主観主義から強く影響を受けたのではない。さらに『マルサスとセー』において彼がシュトルヒから得た認識をどのようにセーの議論と結び付けたかを、探る必要がある。さらにロッツも無視できない。『国民経済学の基本諸概念の更改』(1811-14)においてロッツは、フーフェラントとゾーデンからの使用価値論の受容を示すとともに、必需品を高く・奢侈品を低く規定する価値の「階梯」をカントの定言的命令のように精神が意識すべきであるとした(原田 2007)。ラウがセーを受容したとしても、シュトルヒとロッツをも挙げるラウの叙述は、ドイツ古典派内部での議論を経ているのである。その脈絡の解明を通じて19世紀前半のドイツの主観主義の特性を明らかにすることこそ、我々の課題であろう²。

3. マルサスへの部分的な合意と、農場・ツンフトの維持という「社会的」側面

ラウが『マルサスとセー』の出版を通してマルサスから多少なりとも影響を受けたことは、考えられる。ジネーヴェは、同書においてラウが「論争的なテーマに関する、論拠のある学術的な把握についてはセーに依拠しているとはいえ、自らマルサスに味方している」(Sinewe 1965, S. 13)としている。『教本』(初版)第2巻でラウが言うには、「家族の生計の予測をせずして結婚することが義務に反するということを各人に理解させねばならない」と説く限りで「マルサスは完全に正しい」。ただし、軽率な結婚の結果貧困に陥った人々とその子供たちとにその運命・苦悩を委ねるしかないとする点で「彼は行き過ぎである」(Rau 1826-37, II, § 331, Anm.)。

こう考えるラウは「社会的」側面をもつ。「営業の自由の導入が農民と手工業者の生計を脅かすとき、対立しあう自由主義的目的と社会的目的とがラウによって比較考量される。こう言えるのは、ラウがツンフトと、農場の必要最小規模と〔の維持〕を支持しているからである。」その意味でラウは「保守的自由主義の大学教員かつ議員」であった(Schefold 1997, I, S. XXXVIII; vgl. Neumann 1927, S. 94-5)。彼は初期の『ツンフト制度について』(1816)で次のように言っている。「営業の自由はしばしば貧窮へと至る。個別の諸業種が過度に雇用されても、他の業種はなおざりにされる。多くの場合その帰結はもっぱら有益なものであるとはいえ、それでさえ他方で多大な犠牲が払われており、国家は飢えた人々という重荷を背負わされる」(Rau 1816, § 28)。このように彼はツンフトの——少なくとも即時の——廃止に難色を示すが、彼自身はスミスの自由競争の利点を認めながらもそうした姿勢をとるのである。単なるスミス拒否ではなく「ポスト・スミスの」とする研究者もいるほどである(Tribe 1988, p.187)。

² なぜドイツ語圏では19世紀後半になるまで労働価値説が大きな位置を占めなかったのかということは、大きな問題である。カント的な理念の存在もひとつの理由かもしれない。

ラウによるツンフト論それ自体を明らかにする必要があるが、それとともに2つの論点が浮かび上がる。第1に、ツンフトの利点を保持する方向での「社会的」企図は初期に限られたものか。この問題はラウにおける初期とそれ以降との区別にかかわる (Brandt 1992/93, I, S. 186 は 1821 年の『国民経済の諸見解』以降を区別する)。第2に、19世紀初頭フィヒテ、A.ミュラー、ヘーゲルが多かれ少なかれツンフト的な性格の職業団体に——それぞれ中世でのその独立性と国家介入とを承認する度合いにおいて異なるが——社会的意味を付与していたが(Harada 1989; 高柳 2000, p. 113-31)、それらを当時の主流派経済学者(となる)ラウとの関連で位置付ける必要がある。

4. 保護関税の提唱と、リストとの関係

ドイツ諸邦の「内国交通の自由化」と「外国に対する共同の関税障壁」という主張はすでに『マルサスとセー』のラウによる結論部分に見られ(Rau 1821, S. 298-9)、『教本』にも続いていく(Rau 1826-37, II, § 297)。これがリスト『政治経済学の国民的体系』(1841)と同様の主張であるだけでなく、ラウが(少なくとも)1821年に説いた農場の必要最小規模の維持という主張も(Schefold, a.a.O.; Neumann, a.a.O.)、リスト『農地制度、零細経営、国外移住』(1842)での基調と一致する(リストの場合はMöserの影響がある)。したがって、リスト主導のドイツ商工業協会の『機関紙』へのラウの寄稿や、ラウの紹介状を携えての彼のプロイセン政府訪問も(諸田 2003, p.109-11)単なるラウの権威を借りたリストの所作として片付けるわけにはいかず、両者における思想的なつながりが(影響関係は単純ではないかもしれぬが)推測される。

このことは、ラウがリストと同様鉄道建設を提唱したこと(Neumann 1927, S.93; 諸田 2003, p.223)を考慮に入れるとなおさらのことである。リストが1939年のG.v.コッタ宛の手紙で「20年来の観察と考察の後に私がハイデルベルクのラウよりも[...]進んだ、ということと言っても許されると思います」(List-Briefe, S.550)と書いていることは、逆にリストがラウを強く意識していたことを示す³。他方ラウは1843年に、リスト『国民的体系』を評して「いずれにせよその著者はその学問[経済学]の基礎すべてに対して決然と取り組んだのではなく、自分の実践的で得意な思想を妨げると彼に思われる事柄に対して論争を挑んだにすぎない」と述べている(Rau 1843, S. 3)。

5. ラウからメンガーへ、また歴史学派へ、A.ヴァーグナーへ

E.シュトライスラーは論文「ドイツの経済学者、カール・メンガー」(1990)で、ドイツ古典派なかでもラウの『教本』の使用価値論に、しかも版を重ねるごとに需要の意味をより個人主義的に強調するその議論にメンガーの先駆性を見るべきであるとして(Strelssler 1990, S.

³ 1838年パリのリストがライプツィヒの妻に持参するよう手紙で指示した複数の書物のなかにレイモンドの著作があることが指摘され、彼とレイモンドの関連が明らかにされているが(高橋 2005, p.45-6)、複数の書物にはドイツ古典派のロッツ、リュエダー、ヤーコブも含まれている。またリストはコッタとB.ヘルダーにラウの本を送るよう要請している(原田 2006, p.19)。

166)、学界にセンセーションをまきおこした。彼によれば、「メンガーは彼の『原理』において革命的にふるまっていなかったのであり、それどころか自分のことをドイツ経済学の完成者と思うことができた」のであって、これまで限界革命と呼ばれていたメンガーの議論は実は「19世紀中頃の輝かしいドイツの理論経済学のさらなる受容と継承」(Ibid., S. 178, 184)なのである。こうした方向での研究に対しては「針を反対の方向に向けすぎて、メンガー『原理』の出現による断絶を明確にしない傾向がある」(八木 2004, p.79) という批判はあるとしても、やはりラウおよびドイツ古典派に由来する客観的使用価値論からメンガーへという経路が無視できないのは、実際メンガーが初版『原理』(1871)の準備期においてラウ『教本』第1巻(第7版、1863)での需要・供給曲線と格闘していたことや(同、p.46-7)、『原理』の注でB.ヒルデブラント、フリートレンダー、K.クニースらの使用価値の算定に関する議論が詳細に検討されているからである(Menger 1871, S.108-13, 邦訳、p.93-8; その他 Ikeda 1997)。

その注でメンガーは、ドイツ古典派から彼らに続く「種類価値」概念を取り上げて、人間を満足させる諸財は種類によって順位が決まるとするその観念を批判し、財の種類に関係なく個人にとっての限界効用を基本に価値論を打ち立てるべきことを説く。しかし、この作業はメンガーの観点から必要だったとしても、もし我々がそれのみでもってよしとするなら、ドイツ古典派およびその価値論の独自の意義を無視する危険性がある。「種類価値」の観念は、ロツツにおける価値「階梯」という萌芽的思考から、ラウの改訂版『教本』を経て、クニース、フリートレンダー、ヘルマン、ヒルデブラント、A.ヴァーグナーまで続くが(Priddat 1997; ラウの後任クニースについて八木 2004, p.133-56)、少なくともロツツを見た限りでは、「奢侈」(宝石その他)の主観的価値が異常に上昇する不健全な経済社会から、生活必需品を基本に据える——最も不可欠な財を最重要としその次に不可欠な財をそのあとに位置づける等々といった——価値「階梯」観念を国家の教育政策を通じて普及させて、そのうえで自由競争のスキス的な予定調和の市民的経済社会を建設しようとする志向が見られる(原田 2007)。

A.ヴァーグナーにおけるその継承の意味も考察する必要があるだろう。国有化の観念をもちロートベルトゥス、ラサールに接近した彼をシュモラーやブレンターノから区別して国家社会主義と見なすべきである(田村 1993, p.18)。しかし、国家社会主義のロートベルトゥスやラサールが労働価値説に依拠したのに対して、ラウの弟子として客観的な使用価値説を、なかでも価値階梯としての「種類価値」観念をもったヴァーグナーは彼らと異質な性格をも帯びていた。プリッダートがドイツ古典派から(ラウから)ヴァーグナーへと「種類価値」論で結ぶのに対して、わが国ではヴァーグナーによる『教本』改訂がラウからの「離脱」(木村 2000, p.439-40)として詳細な論証でもって明らかになった。ただし、ヴァーグナーの議論は、財価値の有用性の分類とその段階づけ(生存に絶対不可欠なものを第一とする)を基礎にすえていることからすれば(木村 2000, p.462-3)、同時にドイツ古典派の「種類価値」思想の19世紀後半における社会政策論的な完成として位置づけることもできるのではないかと。

むすび

以上のように、ラウとドイツ古典派の解明はその周辺との関連で多くの点で望まれている。しかし、その際にもそれ独自の議論を明らかにすることを忘れてはならないであろう。それとともにドイツ語圏経済思想の19世紀前半を、さらには全体を描くことが必要である。

文献一覽

- Brandt, K. (1992/93): *Geschichte der deutschen Volkswirtschaftslehre*, 2 Bde., Freiburg.
- Harada, T. (1989): *Politische Ökonomie des Idealismus und der Romantik*, Berlin.
- 原田哲史(2002):『アダム・ミュラー研究』ミネルヴァ書房。
- (2006):「F・リスト」、八木編『経済思想のドイツ的伝統』日本経済評論社。
- (2007):「古いドイツの使用価値学派」の価値規定における公共の「意見」の意味、『国学院経済学』第54号第3・4合併号(近刊)。
- Ikeda, Y. (1997): *Die Entstehung der „Grundsätze“ Carl Mengers*, St.Katharinen.
- 木村周市朗(2000):『ドイツ福祉国家思想史』未来社。
- (2007):「バーダーの近代社会批判」、伊坂・原田編『ドイツ・ロマン主義研究』御茶の水書房。
- List, F. (Briefe): *Friedrich List, Schriften/Reden/Briefen*, Bd. 8, hrsg. E. Salin, Berlin 1933.
- Menger, C. (1871): *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Nachdruck als: *Carl Menger: Gesammelte Werke*, Bd. 1, hrsg. v. Hayek, 2. Aufl., Tübingen 1968, 安井・八木訳『国民経済学原理』日本経済評論社、1999年。
- 諸田實(2003):『フリードリヒ・リストと彼の時代』有斐閣。
- Neumann, K. (1927): *Die Lehre K.H.Rau's*, Diss., Gießen.
- Priddat, B. P. (1997): *Der „Gattungswerth“ oder die Moral der subjektiven Werthlehre in der deutschen Nationalökonomie*, In: Priddat (Hrsg.): *Wert, Meinung, Bedeutung*, Marburg.
- Rau, K. H. (1816): *Ueber das Zunftwesen und die Folgen seiner Aufhebung*, Leipzig.
- (1821): *Maltus und Say, über die Ursachen der jetzigen Handelsstockung*, Hamburg.
- (1826-37): *Lehrbuch der politischen Oekonomie*, 1. Aufl. (Bd. 1, 1826; Bd. 2, 1828; Bd. 3, 1. Abt., 1832, 2. Abt. 1837), Nachdruck, hrsg. v. Schefold, Hildesheim 1997.
- (1843): *Zur Kritik über FList's nationales System der politischen Oekonomie*, Heidelberg.
- リハ、T. (1985): 原田・田村他訳『ドイツ政治経済学』ミネルヴァ書房、1992年(原書1985)。
- Roscher, W. (1874): *Geschichte der National-Oekonomie in Deutschland* (1874), reprint, New York, London 1965.
- Schefold, B. (1997): *Einleitung, und Chronologisches Verzeichnis der Schriften von Karl Heinrich Rau*, Zu: Nachdruck-Ausg., Rau: *Lehrbuch*, je in Bd. I und Bd. III.2.
- Schumann, J. (1997): *Ansätze einer subjektiven Wertlehre und die Theorie der „inneren“ Güter bei Heinrich von Storch*, In: Priddat (Hrsg.): *Wert, Meinung, Bedeutung*, Marburg.
- Sinewe, K. (1965): *Karl Heinrich Rau: Persönlichkeit und wissenschaftliche Leistung in moderner Sicht*, Diss., Uni. Erlangen-Nürnberg.
- Streissler, E. (1990): *Carl Menger, der deutsche Nationalökonom*, In: Schefold (Hrsg.): *Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie*, X, Berlin.
- 高橋和男(2005):「アメリカ国民経済学と「レイモンド・リスト問題」」(上)、『立教経済学研究』第59巻第2号。
- 高柳良治(2000):『ヘーゲル社会理論の射程』御茶の水書房。
- 田村信一(1993):『グスタフ・シュモラー研究』御茶の水書房。
- Tribe, K. (1988): *Governing Economy*, Cambridge.
- 植村邦彦(1992):「ドイツ初期社会主義と経済学」、経済学史学会編『経済学史』九州大学出版会。
- 八木紀一郎(2004):『ウィーンの経済思想』ミネルヴァ書房。